

5月17日の大倉山講演会

有島武郎における近代化

—横浜・札幌・アメリカ・ホイットマン—

明治11年に東京で生まれた有島武郎は、15年に父親が横浜税関長になったため、日本で最もハイカラで、近代化の進んだ横浜に移り、山手の宣教師の塾へ通います。ここでキリスト教の雰囲気を知り、童話『一房の葡萄』が生まれました。学習院を経て、札幌農学校でクラーク精神に出会いますが、有島文学の原点は横浜・札幌にあると言えます。

札幌で本格的にキリスト教に接し、内村鑑三や新渡戸稻造の影響もあり、入信します。農学校卒業後、渡米、ペンシルヴァニア州のハヴァフォード大学で歴史と経済を学びますが、これはクエーカーの大学であり、そのあとボストンのハーバード大学時代に知った詩人ウォルト・ホイットマンの『草の葉』によって、有島のキリスト教は変質します。

「白樺」派の作家として『或る女』『小さき者へ』などを書きますが、『或る女』のヒロイン早月葉子こそ近代化された横浜が産んだものと考えられるでしょう。

◇日時：平成26年5月17日（土）午後2時～3時30分（開場は午後1時40分）

◇会場：横浜市大倉山記念館 ホール

横浜市港北区大倉山二丁目10-1 大倉山公園内（東急東横線大倉山駅下車徒歩7分）

◇講師：小玉 晃一（青山学院大学名誉教授）

◇定員：80名（入場無料、予約なし当日先着順）

◇問合せ：大倉精神文化研究所 電話 045-834-6637

Eメール okuraseishinbunka@js6.so-net.ne.jp

ホームページ <http://www.okuraken.or.jp/>



次回 6月21日（土）予告

「文明開化を生きた歌人—大熊弁玉—」講師：増田恒男（大倉精神文化研究所客員研究員）

主催：大倉精神文化研究所 共催：横浜市大倉山記念館

「有島武郎における近代化—横浜・札幌・アメリカ・ホイットマン—」

平成 26 年 5 月 17 日(土) 横浜市大倉山記念館ホール

小玉晃一

有島武郎略歴

- 1878 年(明治 11) 3 月 4 日、東京小石川水道町に生まれる
- 1881 年(明治 14) 東京女子師範付属幼稚園に通う
- 1882 年(明治 15) 父・武大蔵省税關局長兼横浜税關長へ、一家は横浜・月岡町(西区老松町)の官舎へ
- 1883 年(明治 16) 英語勉強のため妹愛と共にセオドア・ギューリック(歯科医)のもとへ通う
- 1884 年(明治 17) 山手の英和学校(現・横浜英和学院)
- 1887 年(明治 20) 学習院予備科
- 1896 年(明治 29) 学習院中等科卒業。札幌農学校予科に編入学。新渡戸稻造教授宅。キリスト教、森本厚吉(同級生)を知る
- 1899 年(明治 32) 定山渓で森本厚吉と心中未遂
- 1900 年(明治 33) 『リヴィングストン伝』(警醒社)出版
- 1901 年(明治 34) 札幌独立基督教会へ入会。1年志願兵(陸軍)
- 1903 年(明治 36) 8 月渡米、ペンシルヴニア州ハヴァフォード大学大学院に入学
- 1904 年(明治 37) 大学院修了。修士論文「日本文明の発展—神話時代から將軍家の滅亡まで—」
フランクフォード精神病院で看護夫 2 か月、9 月ボストンのハーヴィードの大学院に入学
- 1905 年(明治 38) 社会主義者金子喜一の紹介で弁護士ピーボディのところで書生となる。ここでホイットマンの詩集『草の葉』に心酔
- 1906 年(明治 39) 9 月ニューヨークからイタリアへ。ナポリで弟の有島生馬と合流。翌 1907 年初めにかけて共にスイス(シャフハウゼンでティルダ・ヘック)、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、イギリス(クロポトキン)と旅をする
- 1907 年(明治 40) 4 月帰国、12 月東北帝国大学農科大学英語講師
- 1908 年(明治 41) 札幌独立教会日曜学校長。遠友夜学校でも教える。
- 1909 年(明治 42) 3 月神尾安子と結婚
- 1910 年(明治 43) 同人誌『白樺』創刊。「西方古伝」、「二つの道」、「かんかん虫」を掲載
- 1911 年(明治 44) 「或る女のグリンプス」連載(『白樺』)
- 1912 年(明治 45、大正 1) 教会を脱会
- 1913 年(大正 2) 「グリンプス」連載終了
- 1914 年(大正 3) 安子、肺結核発病、鎌倉へ転地
- 1915 年(大正 4) 安子、平塚の杏雲堂病院へ入院。農科大学へ辞表、休職扱い。小説『宣言』
- 1916 年(大正 5) 安子、病院の近くの借家へ。8 月 2 日安子死去(27 歳)。12 月 4 日父・武死去(74 歳)。
「聖書の權威」、「クロポトキンの印象」
- 1917 年(大正 6) 『草の葉』誕生。「死と其の前後」、「クララの出家」
- 1918 年(大正 7) 「小さき者へ」、「カインの末裔」、「迷路」、「生れ出づる悩み」、「石にひしがれた雑草」、同志社大学英文科講師
- 1919 年(大正 8) 『或る女』前篇、後篇。戯曲『三部曲』
- 1920 年(大正 9) 「イプセン研究」、「惜しみなく愛は奪ふ」、「一房の葡萄」、「旅する心」
- 1921 年(大正 10) 「御柱」、「ホイットマン詩集」第一輯
- 1922 年(大正 11) 「宣言一つ」、「星座」。ニセコ(旧狩太)有島農場解放、個人雑誌『泉』創刊。
「ドモ又の死」上演
- 1923 年(大正 12) 『ホイットマン詩集』第二輯、「親子」
6 月 9 日軽井沢の別荘淨月庵で波多野秋子(30 歳?)と心中、7 月 6 日遺体発見
7 月 9 日自宅で告別式(45 歳)
- 【資料】①「一房の葡萄」②イプセン『人形の家』の草稿 ③有島武郎「眞実の意味の新しい女とは」
④『或る女』後篇 ⑤「カインの末裔」

僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通つてゐた学校は横浜の山手といふ所にありました。そこいらは西洋人ばかり住んでゐる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかへりには、いつでもホテルや西洋人の会社などがならんでゐる海岸の通りを通る所以でした。通りの海沿ひに立つて見ると、真青な海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでゐて、煙突から煙の出でるのや、^{ほぼしら} 橋から橋へ万国旗をかけわたしたのやがあつて、眼がいたいやうに綺麗でした。僕はよく岸に立つてその景色を見渡して、家に帰ると、覚えてゐるだけを出来るだけ美しく絵に描いて見ようとした。けれどもあの透^すきとほるやうな海の藍色と、白い帆、前船などの水際^{みずがは}近くに塗つてある洋紅色とは、僕の持つてゐる絵具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いてもく、本当の景色で見るやうな色には描^かけませんでした。

世には二種類の精神的方向、即ち二種の良心がある。その一つは男性の、而して他の一つは、男性のそれとは全然異質な女性の良心である。この二つの良心は相互の間に理解がない。而して実際生活に於いては女性はいつでも男性の法則によつて判断せられている。それはまるで彼女は女性ではなくして男性であるかの如く。

女子は現在の社会にあつては、全然男性化した現在の社会にあつては彼女自身であることが出来ない。今の社会の法則は男性によつて組立てられ、而してその法律制度の下にあつては、女性の行動は男性的見地からのみ批判される。

眞實の意味で云ふ新らしい女と云ふものに對する私の定義は、下の數行に盡きてゐます。即ち『純然たる女性の本能を以て、女性の立場を明確に把握して、そこから自分の生活を生み出すことの出来る婦人』その人こそ眞實の意味の新しい婦人だと思ひます。茲で云ふ『純然たる女性の本能』と云ひますのは、男子には全然持ち得ない、女性にのみ許されてゐる本能を指すのです。この本能を以て一度女性の立場を確りと掴んだならば如何に男子が努力するとも、その立場を破壊することの出來ないところのものを建設する本能を云ふのです。更に言ひ換へれば、男子から全く獨立して女子自らの力のみに依つて自分の世界を建設して行くことの出来る力を云ふのであります。此の本能こそは有史以來男子より虐げられ壓迫されて來た境地から女子自らを解放する鍵であると思ひます。男子に對して反抗する、それも過渡期には已むを得ない現象です。男子に對して女子の要求を叫ぶのも亦必要です。然し女子自ら男子の作つた今までの社會と對立し得る健全な世界を作る事がこの難問題の最後の解決であつて、そこにはのみ一切の束縛から解放された女性の本當の自由の天地は展けるのだと信じます。けれどもかう云ふ境地を作つて行くのは現在の日本の女子に取つて、容易ではないと思ひます。

竹柴館の一夜は正しくそれだつた。その夜葉子は、次の朝になつて自分が死んで見出されようとも満足だと思つた。然しその朝生きたまゝで眼を開くと、その場で死ぬ心持にはもうなれなかつた。もつと嵩じた懲楽を追ひ試みようといふ欲念、而してそれが出来きうな期待が葉子を未練にした。それからと云ふものの葉子は忘我渾沌の懲喜に浸る爲めには、凡てを犠牲としても惜しまない心になつてゐた。而して倉地と葉子とは互々を樂しませ而して牽き寄せる爲めにあらん限りの手段を試みた。葉子は自分の不可犯性（女が男に對して持つ一番強大な蠱惑物）の總てまで惜しみなく投げ出して、自分を倉地の眼に娼婦以下のものに見せるとも悔いようとはしなくなつた。二人は、傍眼には酸鼻だとさへ思はせるやうな肉慾の腐敗の末遠く、互に淫樂の実を互々から奪ひ合ひながらずる／＼と壊れこんで行くのだつた。

小屋の戸を開けると顔向けも出来ない程雪が吹き込んだ。荷を背負つて重くなつた二人の体はまだ堅くならない白い泥の中に腰のあたりまで埋まつた。

天も地も一つになつた。颶と風が吹きおろしたと思ふと、積雪は自分の方から舞ひ上つた。それが横なぐりに靡いて矢よりも早く空を飛んだ。佐藤の小屋やそのまはりの木立は見えたり隠れたりした。風に向つた一人の半身は忽ち白く染まつて、細かい針で絶間なく刺すやうな刺戟は二人の顔を真赤にして感覚を失はしめた。二人は睫毛に氷りつく雪を打振ひく雪の中をこいだ。国道に出ると雪道がついてゐた。踏み壓められない深みに落ちないやうに仁右衛門は先きに立つて瀬踏みをしながら歩いた。大きな荷を背負つた二人の姿はまるび勝ちに少しづゝ動いて行つた。共同墓地の下を通る時、妻は手を合せてそつちを拌みながら歩いた——わざとらしい程高い声を挙げて泣きながら。二人がこの村に這入つた時は一頭の馬も持つてゐた。一人の赤坊もゐた。二人はそれらのものすら自然から奪ひ去られてしまつたのだ。

その辺から人家は絶えた。吹きつける雪の為めにへし折られる枯枝がやゝともすると投槍のやうに襲つて來た。吹きまく風にもまれて木と云ふ木は魔女の髪のやうに乱れ狂つた。

二人の男女は重荷の下に苦しみながら少しづゝ俱知安の方に動いて行つた。

榎松蒂が向うに見えた。総ての樹が裸になつた中に、この樹だけは幽鬱な暗緑の葉色をあらためなかつた。直な幹が見渡す限り天を衝いて、怒濤のやうな風の音を籠めてゐた。二人の男女は蟻のやうに小さくその林に近づいて、やがてその中に呑み込まれてしまつた。